

「絵本ノート」再考

鳥丸 佐知子

本学の伝統的な課題であった「絵本ノート」。担当されていた照屋名誉教授の退官後、紆余曲折を経て『発達心理学』の時間外学習課題として再スタートし、今年で2年目に入った。学生の現状をふまえ、新たな手法も取り入れて再スタートした本課題であるが、多くの絵本に触れる機会の提供、文章を要約する力や絵を描く力の向上、入学後早い時期からの図書館利用率の上昇といった効果がみられた一方で新たな課題もみえてきた。

キーワード：絵本、時間外課題、コメント、達成感、自ら学ぶ力

1. はじめに

保育所や幼稚園における保育実践において、「絵本」の持つ意味は大きい。保育現場では保育者による絵本の読み聞かせは日常的に行われているし、園児が保育室にある絵本を、自ら自然に手に取る機会も多い。絵本は子どもたちにとって、とても身近な存在なのである¹⁾。

小寺・瀧川・玉置（2004）²⁾ は保育実践における「絵本」の持つ意味について①幼稚園教育要領、②保育所保育指針、および③保育内容「言葉」のテキストの類という3つの観点から、絵本と保育者の役割について考察している。

それによると、幼稚園教育要領と保育所保育指針での「絵本」とは以下のように考えられている。保育という現場においての「絵本」は、まず「子どもと絵本の出会い（＝物的環境としての絵本の存在への気付きがあって、それに興味を持つ）」ということから始まる。そして次に「言葉の発達過程に沿って絵本を通しての言葉の持つリズムや、言葉そのもののおもしろさに気づく」段階に入る。次にそのような経験を通して「言葉の感覚が豊かになるきっかけの一つ」としての役割をする段階がある。その後、そういう

「言葉のおもしろさに気づき」「内容そのものへの興味」にいたる過程があり、最後に「絵本の中に描かれた世界」を通して、その子自身の「イメージが広がり」と「想像力豊かになる」という流れ（構造）があるという。

また絵本との出会いには、必ず保育者の援助が伴うこと、さらに絵本は、子どもと保育者のコミュニケーションの場としての、重要な役割もあるとも述べられている。

それでは保育内容「言葉」のテキストの類から読み取れる「絵本」についてはどうであろうか。保育の場においては「子ども」は「保育者」を媒介に「絵本」と出会う。そして「絵本」を媒介に「保育者・友だち」とかかわり、そうしたさまざまな経験含めて「言葉」を獲得する。さらに、それら獲得した「言葉」をベースにして「未知なる世界」や「想像の世界」「物語の世界」などのイメージを広げ、豊かな想像力をもって多くの言葉や表現を獲得していくという流れをたどる。

そしてここでも、より良い絵本環境を整えるためには、保育者自身が子どもの発達過程を十分に把握し、一つ一つの絵本の特性を捉え、目

の前にいる子どもたちにとって、必要な絵本を把握することなど、保育者側に多くの技術が求められる。つまり保育者自身が、事前にたくさん絵本に触れ、絵本に関心を持ち、その魅力について学ぶ必要があることが明記されているのである。

さて、保育士養成校での実際はどうであろうか。保育者を目指すものが、学生時代に多くの絵本に触れる機会を提供する方法として、本学と同じ2年制の短期大学において「絵本100冊読みノート（絵本ノート）」という課題を課している短期大学もある³⁾。この短期大学では「国語（国語表現法）」（半期）を担当する教員によって伝統的に引き継がれている。体裁としては、学生に50枚の大学ノートを用意してもらい、1ページに1冊の絵本の事柄を記入させる。最終的に100冊を目標としているが、時代の流れとともに、この短期大学でも、作成に時間を要する学生が増え、作成のための期間を長くせざるを得ない状況が生まれつつあるとのことである。

現段階では①読んだ絵本の冊数の番号、②絵本の題名、③絵本のお話に出てくる作者名（作者未詳を含む）、絵本を描いた人の名、④絵本の出版社名、⑤絵本に出てくる人物やキャラクター、⑥絵本を通じて、子どもに伝えたいこと、⑦絵本の評価を5段階評価で記入、⑧およそ何歳児向けの本か、⑨絵本の内容、要旨、特色、⑩絵本の感想、⑪絵本の音読と黙読について、⑫書いた日の日付という12項目について記入を求めているという。

本学に伝統的に存在していた「絵本ノート」について簡単に説明する。従来の「絵本ノート」は1年生通年の課題で、絵本のみでなく児童書なども含む50冊以上について、1冊につきノート1ページを使用し、あらすじや感想、イラストなどでまとめ、すべて完成させてから提出すると

いう形をとっていたようである。課題として取り上げる絵本等の種類も細かい指定があり（Table.1 参照）、大変な時間と手間を要する課題であったようだ。しかしその分、自らのノートを完成させた時の喜びや達成感も大きく、当時はオープンキャンパスでこの課題の存在を知り、入学前からこの課題に取り組むことを楽しみにしている学生もいたそうである。また保育所などの就職試験の折に持参する学生もいたようであった。しかし熱意を持って本課題に取り組まれていた前任者の定年退職に伴い、本課題もその存続が危ぶまれることになった。

自らも市立図書館において、20年以上に渡り「絵本読み聞かせ」のボランティアを続けてきた筆者は、個人的にも絵本に対して大きな興味・関心を持っている³⁾。また同時に保育の現場において、絵本は様々な使用法が可能で、その果たす役割は非常に大きいと感じている。そのため可能なら、この類の課題を継続したいと考えていた。しかし、現在筆者は『保育内容 言葉』は担当しておらず、そもそも筆者自身に、本課題を引き継ぐのに必要な、絵本に関する知識や能力が不足している可能性も大きかった。そこで形式を変えて再開することはできないかと考えた。試行錯誤の結果『発達心理学』の時間外課題としてこの「絵本ノート」を再スタートさせ、現在2年目に入っている。

当時とは質の異なる学生も多く入学していることを考慮し、体裁もノート形式ではなく、A4サイズの紙を使用し、基本的には毎回の授業終了後に提出するよう変更した。また頑張ったものにはそれなりの評価ができるよう、ポイント制も導入した。授業回数は15回なのでベースになる枚数は15枚。15枚に満たない場合は減点、15枚以上提出した場合は加点することとした。記入内容に細かい決まりは設けなかったが、絵

Table.1 年齢別絵本リスト

0 歳 児	1 歳 児	2 歳 児
1. いぬいぬいばあ	1. どうぶつのおやこ	1. バナナです。
2. いいおかお	2. もこもここ	2. ひとりでうんちできるかな
3. おふろでちやぶちやぶ	3. ごあいさつ	3. おんじおんじ
4. きゅっきゅっきゅ	4. でんしゃ	4. しろくまちゃんのほっとけーき
5. どうぶつのおかあさん	5. さかな	5. はけたよはけたよ
6. いただきます	6. もけらもけら	6. きんぎょがにげた
7. あかちゃんのずかん 1、2、3	7. まるまる	7. こぐまちゃんのみずあそび
8. こんにちは	8. うさこちゃんとうどうぶつえん	8. ぞうくんのさんぽ
9. おつきさまこんばんは	9. あのねこのねこ	9. たべたのだあれ
10. ででこいでこい	10. おにわのどうぶつ	10. ねないこだあれ
11. いぬがいつぱい	11. いってきまあす	11. ちいさなこねこ
12. ねこがいつぱい	12. おふろだおふろだ	12. へびのクリクター
13. おててがでたよ	13. だろんこ だろんこ	13. みんなうんち
14. くつくつあるけ	14. かばくん	14. ぼくのくれよん
15. さようならこんにちは	15. いたずら こねこ	15. ころころこ
16. ばいばい	16. くらねこかあさん	16. おでかけのまえに
17. びよびよびよ	17. よおい どん	17. つきのぼうや
18. がたんごとんがたんごとん	18. いやだいやだ	18. ぎったんぽつこんくるりんこん
19. はねはね はねちゃん	19. あーんあん	19. どれがぼくかわかる？
20. もうねんね	20. ねてののだあれ	20. たろうのおでかけ
21. にこちゃん	21. だっだあー	21. もしもしおでんわ
22. ミッフィー I (ブルーナ)	22. たんたんぼうや	22. ぞうのばんやさん
23. にらめっこしましょ	23. にこにこかぼちゃ	23. きょうのおべんとうなんだろな
24. ノンタンだれかな、だれかな？	24. ぎゅつ	24. タンタンのずぼん
25. かおかおどんなかお	25. おひさま あはは	25. おやすみ
26. うたえぼん	26. ママだいすき	26. スースーとネルネル
27. こちょこちょこちょ	27. どんどこもんちゃん	27. ねえ だっこして
28. んぐまーま	28. りんごがドスーン	28. なにをたべてきたの？
29. おつむてんてん	29. にんじんさんがあかいわけ	29. たまごのあかちゃん
30. もみじちゃんとチュウ	30. きんぎょがにげた	30. うしろにいるのだあれ
3 歳 児	4 歳 児	5 歳 児
1. いたいいたいほとんどいけ	1. すてきな三人ぐみ	1. ぼちぼちいこか
2. いやいやえん	2. キヤベツくん	2. スイミー
3. ぐりとぐら	3. かいじゅうたちのいるところ	3. おおきなきがほしい
4. ぐるんぱのようちえん	4. フレデリック	4. わすれられないおくりもの
5. ミびきのやぎのがらがらどん	5. のらいぬ	5. うんちしたのはだれよ！
6. 11びきのねこ	6. おばけリンゴ	6. さっちゃんのまほうのて
7. だろんこハッピー	7. てがみをご覧ください	7. ポケットのないカンガルー
8. はじめてのおるすばん	8. はちうえはぼくにまかせて	8. ろくべえまてろよ
9. わたしのワンピース	9. もりのなか	9. おおきいツリー・ちいさいツリー
10. おじさんのかさ	10. あおくんときいろちゃん	10. おにたのぼうし
11. ラチとらいおん	11. だろんここぶた	11. かさじょう
12. てぶくろ	12. スノーマン	12. ミびきのくま
13. はなをくんくん	13. ももたろう	13. ミびきのこぶた
14. ババ、お月さまとって！	14. そしたらそしたら	14. スーホの白い馬
15. からすのばんやさん	15. おおきな おおきな おいも	15. だいきとおにろう
16. おだんごばん	16. だってだってのおばあさん	16. まっくらネリノ
17. ねずみくんのチョッキ	17. ちからたろう	17. だいいょうぶだいいょうぶ
18. そらいろのたね	18. ティッチ	18. モチモチの木
19. おばけのバーバババ	19. のろまなローラー	19. ふたりはともだち
20. ぼくはあるいたまっすぐまっすぐ	20. おおきみと七ひきのこやぎ	20. おしやべりなたまごやき
21. いいこってどんなこ？	21. しょうぼうじどうしゃじぶた	21. ともだちや
22. ねこのはなびや	22. ずーとずーとだいいきだよ	22. としよかんライオン
23. はらぺこあおむし	23. わがままろぼと	23. 花さき山
24. はじめてのおつかい	24. こんとあき	24. タンゲくん
25. とりかえっこ	25. 赤ずきん	25. てぶくろをかいに
26. だるまちゃんとてんぐちゃん	26. きかんしゃやえもん	26. とべバタ
27. ちょっとだけ	27. こうさぎましろのお話	27. めっきらもつきらどおんどん
28. ロージーのおきんぼ	28. きょうはなんのひ？	28. かわいそうなぞう
29. アンガスとあひる	29. ふしぎなだけこ	29. からすたろう
30. 3びきのくま	30. おおきなかぶ	30. とりのせきのますだくん
31. おふろだいすき	31. かにむかし	31. おまえうまそうだな
32. バナナをかぶって	32. おやすみなさいフランス	32. はれときどきぶた
33. かちかちやま	33. こすずめのぼうけん	33. でこちゃん
34. くまさん くまさん	34. おたまじゃくしの101ちゃん	34. ぼくがラーメンたべるとき
35. もりのおくりもの	35. ちいさなヒッポ	35. 100万回生きたねこ

* 本学の図書館 HP より引用した照屋名誉教授のリスト

本の題名・著者・出版社・イラスト・絵本の内容を要約した文章・自分なりの感想やおすすめポイント等を分かりやすいようにまとめるよう教示した。また提出されたものについては、筆者のみでなく、大学院生（TA）にも読んでもらい、印鑑（「よくできました」等のコメントがあるトトロやキティ等のキャラクターもの）と簡単なコメントを添え、次回授業時に返却する形をとった。最終的には、最終提出時（『発達心理学』の試験当日）までに、完成したものすべてを1冊のファイルにまとめ、表紙と目次をつけて提出する。そこで提出された枚数を最終評価とすると教示した。またこの最終的な成果物に対しても、全体の感想を書いたコメントカードを添え、後期の授業開始後に各自に返却するという形をとった。現在2年目が終了したところであるが、2年間に渡って実施したアンケートをもとに、ここまでの経過をふりかえり、次年度へ向けてのたたき台としたい。

2. 方法

1. 調査対象者

1回生の前期に、『発達心理学』を受講していた女子短期大学生

（2013年度：268名、2014年度：246名）

2. 調査時期

『発達心理学』の最終授業時にアンケート用紙を配布。試験当日提出する最終のファイルに添付する形で回収した。

3. 調査内容

①この課題は役に立ったと思うか②この課題をこなすことで身についたと思うか③特に工夫したと思うところ④特に大変だったところ⑤最終的に何冊読んだか⑥コメントは役に立ったか

の6問に関する自由記述。①と⑥については5件法で回答を求めた後、その理由を自由記述してもらった。

4. 倫理的配慮

なお調査対象者には、インフォームド・コンセントを行い、本研究への協力に同意したものを調査対象者とした。回答は任意であること、回答の拒否や中断は可能であり、そのことによる不利益は生じないこと、回答者個人を特定しないものであること、教育・研究の目的以外には使用しないことを口頭で説明し了承を得た。

3. 結果

質問①と⑥については5件法で回答を求めた。まず①については、2013年は約93%に当たる250名が、2014年は有効回答数239名中、約95%に当たる225名が「大変役に立った」もしくは「役に立った」と回答していた。また⑥について2013年は「大変役に立った」が84名「役に立った」が117名で約83%、2014年は「大変役に立った」が76名「役に立った」が112名で有効回答236名の約85%がコメントを意味あるものととらえていた（Fig1・Fig2 参照）。

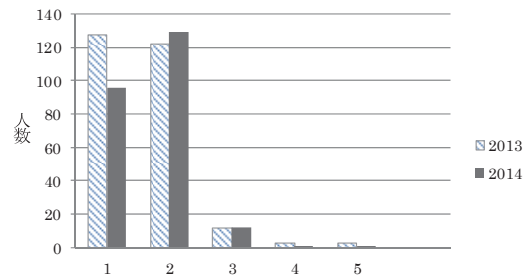


Fig.1 本課題は役に立ったか

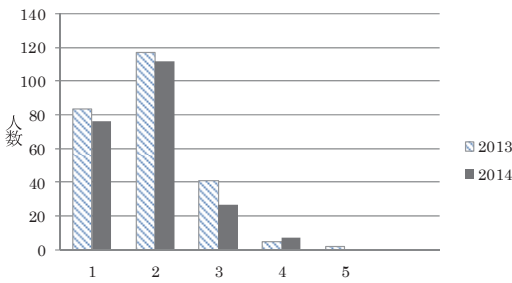


Fig.2 大学院生のコメントは役に立ったか

Fig.3は最終的に何冊読んだかをまとめたものである。ごく少数を除いて15冊のノルマを達成できていた。中には40冊から50冊を読破していたものもあった。各年度の平均読破数と標準偏差は2013年度 ($M=17.5$, $SD=4.6$) 2014年度 ($M=18.3$, $SD=4.8$) であった。

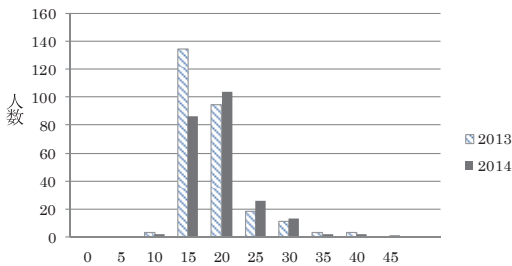


Fig.3 最終読破数

自由記述については、テキストマイニングを実施した。分析にはフリーソフトウェア「KHCoder」を用いた⁶⁾。まずChaSen(茶筌)を用いて形態素分析を行ない、抽出語を出現頻度順に並べ替えた。Fig.4～Fig.9は、各々の問いに対して、出現頻度4回以上の語を用いて「共起ネットワーク」図(抽出語を用いて、出現パターンの似通ったものを線で結んだ図)を作成したものである。質問項目順にまとめていく。

まず「①この課題は役に立ったと思うか」という問いに対しては、前述のように90%以上が

それなりに役に立ったと感じていた。その具体的な内容について自由記述を求め、その内容を分析したものがFig.4になる。この図を見るといくつかのまとまりがあるのがわかる。まとめると「この課題に取り組むことで、たくさんの絵本を読む機会に恵まれた」こと、「それは将来、保育園や幼稚園の現場でも必要なので役立つであろう」こと、「絵を描く練習にもなり、絵を描くことが好きになった」こと、「普段よりもたくさんの絵本に触れる機会になった」ことなどが読み取れる。他にも具体例から、この課題を考えるのが習慣になって楽しかったことや、子どもの気持ちを考えて読むようになったことなどのコメントもみられた。

次に「②この課題をこなすことで身についたと思う能力」についてまとめる。ここでは「絵本の内容を要約する(あらすじを書く)」力や「絵を描く」力が身についたと感じているものが多かった。また子どもの立場(目線)や登場人物の気持ちを感じたり考えたりするようになったことや、絵本のあらすじなどを自分なりに短くまとめて表現する力なども身についたと答えていた(Fig.5参照)。

具体的な事例としては「本をよく読んで絵を描く力とあらすじを書く力だと思います。何枚も書くうちに少しずつではあるけれど力がついてきているのではないかと思います」「あらすじを短く自分なりにまとめることや、この本を子どもたちに読んであげるとイメージした時の注意点などを見つけることができる力」「絵本を読んで終わりではなく、この絵本で学べることや、どんな子に読んであげたいかなど考えられるようになった」などがあった。

「③特に工夫したと思うところ」では、全体の中で絵やあらすじをどのように配置するか、レイアウトや色、デザイン等に工夫したと答えた

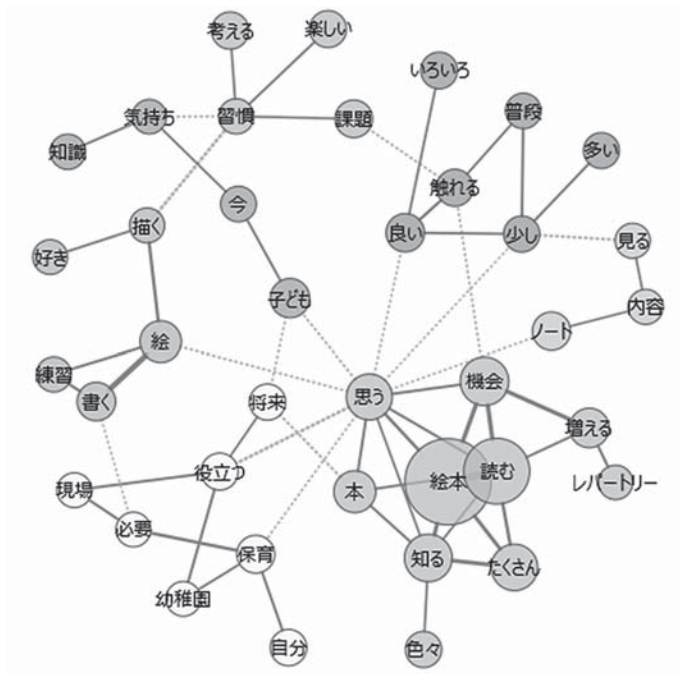


Fig.4 本課題は役に立ったか

Table2

抽出語	出現回数
絵本	228
読む	118
機会	56
思う	52
たくさん	46
知る	37
絵	33
本	33
子ども	21
書く	21
増える	21
ノート	17
保育	15
課題	14
考える	13
知れる	13
読める	13
いろいろ	12
楽しい	12
触れる	12
自分	10
将来	9
少し	9
色々	9
多い	8
描く	8
役に立つ	8
良い	8
今	7
普段	7
種類	6
習慣	6
出来る	6
知識	6
見る	5
好き	5
大変	5
内容	5
練習	5
レポート	4
気持ち	4
現場	4
必要	4
役立つ	4
幼稚園	4

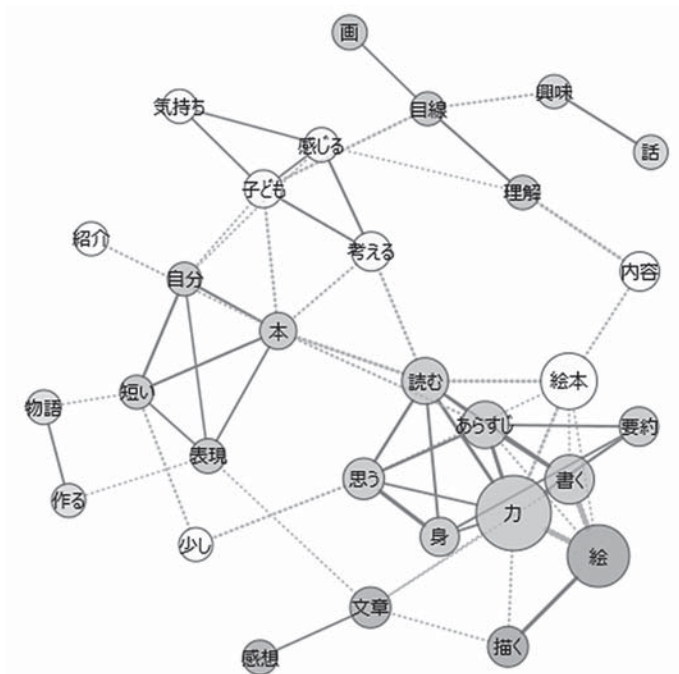


Fig.5 身についてと思う能力

Table3

抽出語	出現回数
力	162
絵	89
絵本	76
書く	55
読む	43
思う	31
描く	24
考える	20
身	20
内容	20
要約	20
あらすじ	16
子ども	16
色	14
文章	14
本	13
文	11
たくさん	9
伝える	8
画	7
感想	7
表現	7
感じる	6
気持ち	5
上手	5
理解	5
話	5
課題	4
興味	4
作る	4
視点	4
時間	4
自分	4
少し	4
紹介	4
説明	4
短い	4
読み取る	4
目線	4

ものが多かった。また読む人に絵本の持つ雰囲気を感じてもらえるよう、子どもが読むときの気持ちを考えながら絵や文章を表現したものも多かったようである。具体例としては「見た人が読みたくなるような絵や配置や色使いを工夫した」「感想は子どものことを考えて書いた。出来るだけ本物に近くなるよう色を工夫した」「絵本の内容の雰囲気が少しでも伝わるように、色鉛筆の塗り方を工夫しました」「見た人が楽しめたり、お話の雰囲気を感じたりできるようにした」などがあった。

「④特に大変だったところ」については、あらすじもさることながら「絵を描くことが苦手で」そこが難しく、大変だったと答えたものが多かった。また③と同様に、自分なりのレイアウトやデザイン、子どもに伝わりやすい形を考えるとなども苦労したようである。結果的に「特

に工夫したところ」と「特に大変だったところ」は内容的に重なるところが多くなっている。具体例としては「絵本の中で「子どもがどう感じるか」「子どもにどう感じてほしいか」など、あらすじと感想で読んでわかりやすいようにした」「絵をクレヨンで描いたりペンで描いたりワンパターンにならないようにした」などがあった (Fig.6 と Fig.7 参照)。具体例としては「私は絵を描くことが苦手なので絵が大変でした」「絵を描くことが大変でした。読んだ絵本の中にも難しい絵のものがあって、あらすじなどは書けたとしても絵が難しくて描けず絵本ノートにできないものがあって残念でした」「読み手がひきつけられるようにあらすじを書くのがむずかしかった」「あまり文章のない (小さい子が読むような) 本はあらすじや感想が書きにくかった」などがあった。

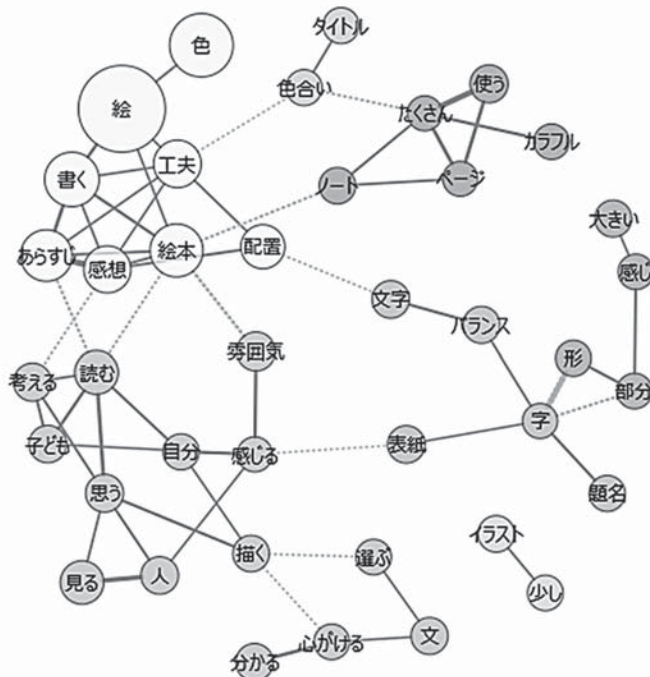


Fig.6 特に工夫したと思うところ

Table4

抽出語	出現回数
絵	114
色	62
書く	49
絵本	40
工夫	28
感想	27
読む	24
見る	23
あらすじ	18
配置	16
デザイン	10
雰囲気	10
考える	9
使う	9
子ども	9
思う	9
表紙	9
バランス	8
人	8
描く	8
分かる	8
文字	8
レイアウト	7
大きい	7
イラスト	6
ノート	6
タイトル	5
自分	5
色合い	5
題名	5
たくさん	4
カラフル	4
ページ	4
感じ	4
感じる	4
形	4
字	4
書き方	4
少し	4
色づく	4
心がける	4
選ぶ	4
特に	4
部分	4
文	4
文章	4

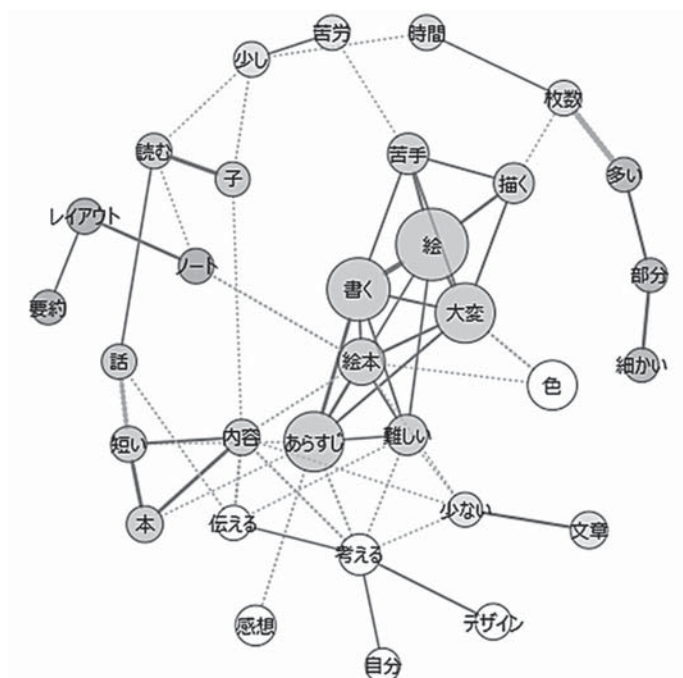


Fig.7 特に大変だったところ

Table5

抽出語	出現回数
絵	109
書く	78
大変	69
色	48
絵本	35
あらすじ	24
難しい	22
苦手	20
考える	20
描く	20
感想	18
本	10
デザイン	8
内容	8
少し	7
短い	7
文章	7
ノート	6
時間	6
読む	6
枚数	6
苦勞	5
伝える	5
話	5
レイアウト	4
細かい	4
子	4
似せる	4
自分	4
少ない	4
多い	4
部分	4
毎週	4
要約	4

次に「⑤最終読破数に対する感想」について、こちらは読破数のみを見れば、Fig.3に示したように、ほぼ全員がノルマの15冊は達成できていた。しかしながら15冊で終わった学生の大半が「もっと頑張ればよかった」「もっとたくさん読みたかった」という内容のコメントを残していた。一方で20冊以上達成できていたものの多くは満足感を表していた。共起ネットワーク図からも、読破数に満足した人がいる一方で「もう少したくさん読めたのではないかなと思う」と答えた人も多かったのがうかがえる。また、最初自分が考えていた冊数より少なかったことを残念に思う記述も見られた。20冊以上読破した学生の感想をいくつか紹介する。「とても満足いく数字だった。絵本を読んだのは久々で、借りたり、本屋で探してみたり、家の本を探していたりしたらこんなになって、内容もそれぞれ面白くてとても良かった(40冊)。「自分自身15冊

でやめようと思っていたけれど、15冊以上読んでみると、楽しくなってきた、わくわくしました。普段読まない絵本を読むことができたので良かったです(28冊)」「20冊を目標にしていたが、それも超して26冊読めたので絵本の良さも分かり、良い勉強になりました(26冊)。」などがあった(Fig.8参照)。

最後に「⑥大学院生のコメントは役に立ったか」についてまとめる。Fig.3によれば80%以上が役に立ったと答えていた。自由記述の内容からその詳細を見てみたい。共起ネットワーク図を見るといくつかのまとまりがあるのがわかる。まず自分の絵本ノートを読んで、それに共感してくれる人がいること、感想がもらえることなどがうれしかったとするものが最も多かった。基本的にはコメントを楽しみにしていた人が多かったようである。他にも自分とは違う視点に気付くことや、アドバイスが役に立ったと

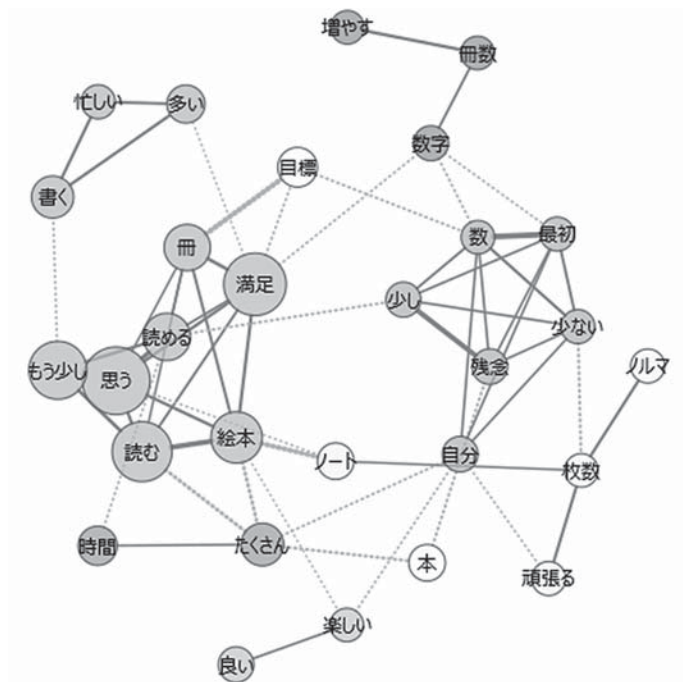


Fig.8 最終的に読んだ冊数に対する感想

Table6

抽出語	出現回数
思う	7
思ふ	6
思ふ	5
もう少し	5
絵本	4
読める	3
冊	3
たくさん	2
書く	1
目標	1
時間	1
多い	1
本	1
ノート	1
自分	
書ける	
数字	
残念	
少し	
良い	
ノルマ	
頑張る	
最初	
少ない	
忙しい	
課題	
楽しい	
冊数	
数	
増やす	
枚数	

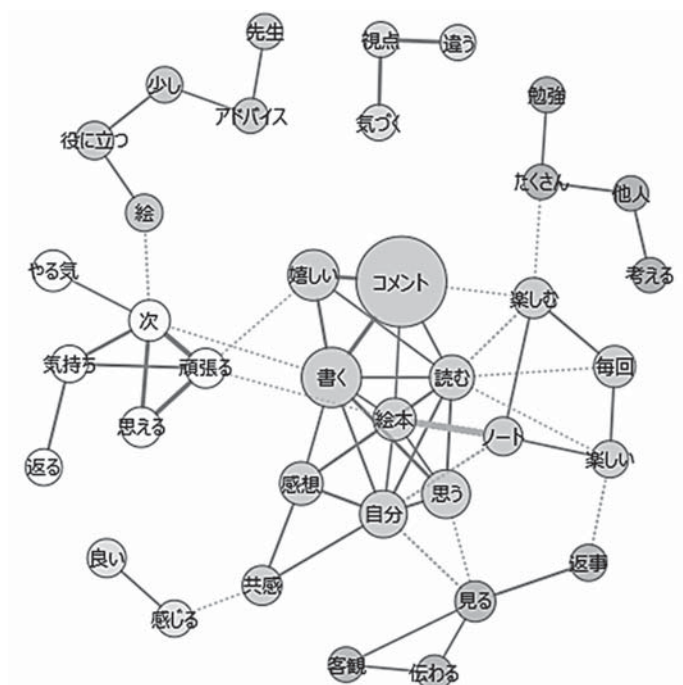


Fig.9 大学院生のコメントは役に立ったか

Table 7

抽出語	出現回数
コメント	13
書く	6
娘い	3
陥	3
自分	2
様目	2
絵本	2
感想	2
毎年	1
見る	1
次	1
やる気	1
染む	1
思える	1
頑強	1
共感	1
ノート	1
似に立つ	1
良い	1
分かる	1
終	1
気づか	1
気づく	1
丁寧	1
返る	1
返事	1
少し	1
たくさん	1
違う	1
考える	1
先生	1
伝わる	1
勉強	1
アドバイス	1
楽しい	1
き	1
香	1
親身	1
他人	1
経緯	1

いう意見もあった。またコメントがあることで、次はもっと頑張ろうというやる気を引き出す要因にもなったようであった。具体例をいくつか挙げる。「コメントをもらえるとすごく嬉しかったし、そういう考えもあるななど勉強になりました」「感想に対してのコメントとか共感してもらったりして嬉しかった」「どんなコメントが書かれているか毎回楽しみでした。コメントが励みになりました」「コメントが書いてある日はちょっとうれしかったです。読んでくださる方がいるんだな、もっと丁寧に書かねばと思いました」などがあった (Fig.9 参照)。

4. 考察

近年「本を読まない」「文章が書けない」「自分の頭で考えようとしない」など、基本的な学力が不足している学生が増えていると言われる。長年に渡り「絵本ノート」課題を取り組み続けてこられた照屋名誉教授も、当時、近年になるにつれて、締め切りまでに課題を提出できない学生が増えてきたことを嘆いておられた。

10 数年前とは質の異なる学生が入学してくるかもしれない環境の中で、それでも本課題に興味を持ち、継続して取り組んでもらうためにはどういう工夫が必要か。今回「絵本ノート」を再開するに当たり、筆者なりにいくつかの仕掛けをほどこした。そのヒントとなったのが、次にあげる「ARCS 動機づけモデル」とよばれるものである。

このモデルは教育工学の分野における研究で、学習者の動機づけを高め、学習意欲を持続させるため、授業（課題）をより魅力的にする工夫や方法をまとめた代表的なモデルである^{7) 8)}。

ARCS は「アークス」と読むが、それぞれの頭文字は、A (attention) (注意)、R (relevance) (関連性)、C (confidence) (自信)、S (satisfaction)

(満足感) を表している。これら 4 つについて簡単に説明する。

まず一番目の A (注意) は、どんなことを教えるにしても、まず教える内容に興味を持ってもらわねばならないということである。今回の課題なら、何はともあれ「絵本関連の課題とはなんか面白そうだ!」と、まず「絵本」に関心を持ち、注目してもらわなければならない。

2 番目の R (関連性) は、今取り組んでいる課題が、自分にどのように関連があるのか、学生側に示すことが大切だということである。「これが自分にどう役だつのか」をはっきり示すことで「やりがい」を引き出す。今回の課題なら、実習や実際の保育現場において「絵本」の果たす役割は大きいので、この課題をこなすことは将来必ず役に立つと授業の中でも繰り返し伝えることなどがそれにあたる。

3 番目の C (自信) は、自分が取り組んだ課題について、自信をもってもらうということである。課題が終わった後に「やっぱりできなかった」では意味がない。そうではなく「やればできそうだな」という感じを持ってもらうことが大切になる。そのためには、出来るだけ成功体験をたくさんさせることが必要で、学習理論の「スモールステップの原則」に従い、やさしい (自分でもできそうな) 課題をたくさん用意して、うまくクリアできるような機会をたくさん作る。さらに自分のペースで進められるよう計画する。それにより、プレッシャーを受けずに挑戦することができる。

今回の課題では最終ノルマは 15 枚提出であったが、いつ提出するかは個人にゆだねることにした。計画的に毎回提出することが最も効果的で、望ましいとは考えていたが、他の授業課題と重なる時期もあり、仮に提出できない週があっても、次回補えば問題はないことを伝えた。

また2回に1回の割合で、TAに（基本的には「ほめ言葉」で）コメントを記入してもらうことにした。筆者以外にもこの課題を見ている人がいる、そしてその人は自分の絵本ノートを基本的にはプラスの方向から見てくれる、ほめてくれるという認識は、また頑張ろうという原動力のひとつとなった。

4番目のS（満足感）は「やってよかったな」という満足感を味わってもらうことである。そのためには、クリアすべきゴールを明示しておいて、それに向かって挑戦させる必要がある。今回は15枚ノルマに加えて、ポイント制を設けたこと（15枚以上提出した場合、枚数に応じて加点される）も彼女らのやる気を引き出す原動力になったようであった。

これらをふりかえると、毎回提出という形をとったこと、簡単ではあるがコメントを返したこと、頑張ればポイントになると告げたことなどは、彼女らがこの課題に取り組み、やり続けるための原動力とはなったようであった。しかし、筆者の方で、「絵本ノート」課題を授業の課題としたために、本課題そのものも、授業が終わる前期半期で終了することになった。後期になって学内で出会った学生の中に「もっと続けたい（続けるつもりだった）」と言う学生がいたことには驚かされたが、最初の数冊はまとめるのに苦労していた彼女らも、途中からは要領をつかみ、課題が面白くなりかけたところで終了してしまったと感じた学生もいたのかもしれない。

この課題を再開したことで、結果的に図書館の利用回数も増え、学生にとっては、1回生時から図書館を身近なものと感じられるようになったようであった。しかし絵本に関するテーマは、本来、『保育内容 言葉』に最も関連する分野でもあり、筆者の担当する心理学関係の授業で、どこまで介入が可能かは、今後の課題のひとつと

して残されたと言えよう。筆者以外にも「絵本」を授業の中で多用している教員もおり、今後、横の連携も必要になってくるかもしれない。

最後に、鈴木（2012）²⁾の中でも指摘されている、この類の課題を実施するうえでの問題点についてまとめてみたい。この短期大学では100冊の絵本を読むことを義務付けているのだが、学生が主体的に取り組むことが大前提とされており、物事に持続的に取り組むのが苦手な学生にとっては自己管理が大変なこともあるようである。結果的に、提出期限の直前に、慌てて課題に取り組み、表面的に形を整えるだけのものを提出することになるものも存在する。その場合、もし仮に課題の提出はできたとしても、この課題に取り組むことで、本来身につくはずの様々な力は身につかない。

本学で「絵本ノート」を長きに渡って続けておられた照屋名誉教授も、当時、年々締切りに間に合わない学生が増えていることを嘆かれていたのを今でも記憶している。自己管理や計画的に物事を進めることが苦手な学生は、年々増えているのかもしれない。

そこでその部分を補う手段のひとつとして、通年のノート形式ではなく、毎授業後に1枚の紙で提出するという形に変更した。さらに筆者が担当するすべての授業で使用している「大福帳」⁹⁾にも進行状況を書き込むようにした。それによって何回目の授業までに、どの絵本を用いて、何冊の絵本ノートをすでに完成しているのか、一目でわかるようになった。この視覚化できる情報も、学生の自己管理に、効果をもたらす要因のひとつとなったようであった。

ちなみに「大福帳」とは、大規模な授業で使用される、受講生・教員間のコミュニケーション・カードのことである。受講生は毎回の授業の最後の5分程度を使用して、150字程度の文章

で、その日の授業をふりかえってもらう。筆者の講義では、授業関連のみでなく、それ以外の連絡事項や、様々な質問用として使用している学生もいる。また、自らの就職活動情報や悩みの相談などを書き込む学生もあり、問題が起こる前の予防対策としての役目も果たしているように感じている。また筆者にとっても、個人個人の顔が垣間見えるものとして重宝している。

しかし、毎授業ごとに提出させ、次週に返却するという方法は、当然のことながら、コメントを書く作業等も定期的に実施しなければならず、実習訪問指導等で出張が続き、筆者とTAの大学院生の都合がうまく合わない場合など、時間のやりくりが大変になることも多かった。これら、今後に向けて改良が必要である問題点は、まだ複数残されている。

さて、筆者が全クラスを担当するもう一つの科目『教育心理学』があるが、こちらは現在2回生後期に開講されている。将来的にそちらでも実施できないか現在検討中である。

鈴木(2012)²⁾も述べているように、本来「絵本ノート」の選ばれる絵本の選定に偏りがあることは、筆者自身も望ましくないと考える。しかし、1回生前期に開講されている『発達心理学』の課題として実施したこの2年間については、まずは少しでも多くの絵本を手取る機会を作ることを第一の目的としたため、選択する絵本の詳細について細かい指定はしなかった。ただし、以前の担当者が作成したリスト(Table1)の配布は行った。この点も現在は残された課題のひとつであろう。

仮に2回生の後期に今回と同じ課題を実施した場合、ほとんどの学生が、すべての実習を終えていることになる。「絵本の選び方」や、「何を目的にこの絵本を読み聞かせたいか」等についての学生自らの思いも、実習経験を重ねるこ

とによって、1回生時に比べ、より具体的なものとなっている可能性はあるのではないか。また、同じ絵本を取り上げても、1回生の時と2回生の時とでは、異なった読み方をする可能性も考えられ、内容の異なる「絵本ノート」が作成される可能性もあるように思われる。

いずれにしても、2年間という大変短い期間で幼稚園教諭と保育士という2つの資格を取得して卒業する学生が多い本学において、時間割はかなりタイトなものになっており、学生は日々の生活に追われている感じが否めない。無理をせずに、自然に過ごす学校生活の中で、気が付けば多くの「絵本」に触れていたと思えるような、生活の中に埋め込めるような提供の仕方を、今後も探っていきたいと思う。

引用文献

- 1) 寺村輝夫・渡辺めぐみ 保育現場における絵本の役割(その3) 文京女子大学研究紀要 第1巻第1号 113-127 (1999)
- 2) 小寺玲音・瀧川光治・玉置哲淳 保育実践における絵本の持つ意味に関する考察 エデュケア 25 31-45 (2005)
- 3) 鈴木正和 絵本を100冊読み、ノートを作成する意味に関する考察 山陽学園短期大学紀要 第43巻 16-32 (2012)
- 4) 鳥丸佐知子 魔法の宝箱『図書館』 あーゆす(2009)
- 5) 鳥丸佐知子「絵本ノート」再考 日本発達心理学会 第25回総会発表論文集(2014)
- 6) 樋口耕一 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版(2014)
- 7) Kaller,J.M(著) 鈴木克明(訳) 学習意欲をデザインするーARCSモデルによるインストラクショナルデザイン 北大路書房(2010)
- 8) 向後千春 教師のための「教える技術」 明治図書(2014)
- 9) 向後千春 大福帳は授業の何を変えたか 日本教育工学会研究報告集 6 23-30 (2006)

尚、本研究は京都文教短期大学特別研究費助成を受けて実施したものである。